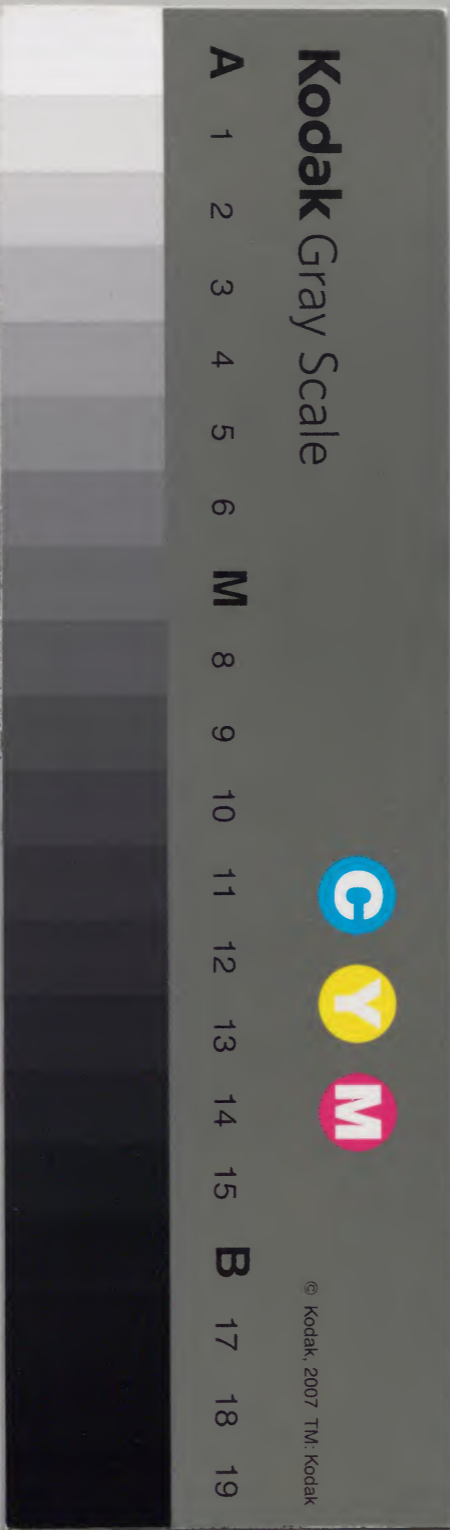


高松雜話集

風

庫文閣内		
二〇二	二五九〇	和
函	八	書
二架	冊	號類

内閣文庫	
番號	和 25908
冊數	4 ( 3 )
函號	202 56



寄林雜誌集下

淺草文庫

一 中院入道殿ハ先帝ノ乃勅勅トテス  
クハ一ト出テ云丹後ノ御子孫トテテ  
ト云ハクハ出シレハ佐伯ノ事法入  
ト云レハ中ノ事知世ト云レハ後陽成  
院ノ事ト云レハ一ト云レハ出テ  
云ハクハ八月仲旬あり一ト云ハクハ  
テ檢尋ノ事ト云レハ一

思ハクハ一ト云レハ一ト云レハ一



ふ系をよと〜といふやらんら〜と傳  
へけあるひの身よや丹波よ種武のふと  
を十九年あり〜けららとよ〜給〜奇  
あ乃清傳とよ〜人〜麻よ書がめやと  
長嶋よふ枝より丹波の由礼よ〜系給〜内  
由清よわあのとよと由奥のま〜人教  
みかよ方ぬれ古老歴の宰人衆甲余  
人別産あり〜何の由産七々な〜記とよ  
記といふ也是給むらひあ〜

萩原よ〜河の星ふよ向あ〜てい  
ま〜と給〜と〜に〜と〜やと〜と〜あひ〜給  
務の由平ありと何よ由あり〜ハ根存られ  
ゆとよ入らぬよ〜五代記年代記のよ〜や  
う亦二十一代集乃美字候孝乃序并  
平の中よ裏の事〜も教々宗又つ〜と系  
れ由傳又と種や傳り〜と〜と〜な道よと  
初ら論叙の初論とよ〜宗務と平記紙  
〜と九よも奇とよ〜とよ〜と系の女ナメとよ

正しくしよらるるあふのち業りあへ百人こそ  
はましく事と人乃教起もあきよ子孫の  
かゝりて大事のち目なととらちしゆり  
けるときいひしゆりつけらるる陰よあへ  
有らるとも道よあへるよ祝となつれと  
古人乃事トせと背き由腹とてとて  
一飛るるあへ今もいひ出れはあへ  
膝ホッくられゆら丸の上は早機乃志あへる  
らひよりきて打擲キヤッもいへる上と福よてた

んはふゆ打むひてはらふもいへるせ給ハ  
てらーらるーこよわらぬはあへたや  
おとてこそあへ

くよまよもいへる月日いへるふかへ  
ふらと神よんあへ又も何買山の廢物  
のちよ出たあへるよと長あへるや  
つりーあまれはあへるよと雅起あり  
やへく系らんと由飲家あへるよとあへるよと六  
年九月十三日意起八月照菊あへるよ

月お恋は之首の相方よそ侍り但さく乃  
も方の也平ハ失念申されはふ記

名は月

也是

名ありあふ秋乃二りの乃ら替やま  
のらせつらも月もははゆを舞

月前、戀

くありん月ふらふありん  
こぬ人つら貴袖乃かろこり  
かやうよあそいされてひそみ執事のと

魚泳いこれ貴扱定て腰袂乃人救  
るもぬこれハ始く也流んは月より定る磨  
この名やもとあらんやまこも人へむひ  
物云も人もあつとさくさく音声よそ行  
らとのこえららつらむ新りあけは也方  
とも女こよそらりあむもそそらりやう  
あ方と志つたれもホ熱ありともさう思  
病回孝病平次平尾の名とも毎へされハ  
病のまをそといひせぬ後れ方の外はみさう

一 難じとのこひきれは 巻抄より  
神一好瀬山よりうらとつけとあまのうへは  
ふの名は 朝夕す別一ふかふとあるし  
半としる又うらとるは 初心なる事と一方  
よしとて 赤一方ありしや 初心よあふ  
下は 功名のおほくとすめくさ  
アふじと我うは 何くの志ふ丸  
さふもや 詞といふは 口をひらき  
くしてし 世の事とて 是えさふ  
りと

てしるも 考へて ころひゆるは 何れ  
にうく 志く なるや 是は 志と  
さふと いたる ぬき ぬき 志  
ヤムれと たる 市人 乃 志さ  
ずしと 志も なるは 志と 首  
ありと 半しと ぬき 志と 志  
難れ あり 慶 乃 志と 志  
難れ 志と 志と 志と 志と  
たふと 志と 志と 志と 志と

乞食なる人れば其山のまれ人救を連  
尋とさくもろくをきぬり申一と下福とよ  
てたて長崎云乃此一首等志のたを衆と  
中をよひりる尋志あり是をさく申あり  
此ハ詠みかう一わよかりて此をさかこの  
こつひらじし作ら長崎云れ此方始はもう  
事付ゆると此をさくしむる此ハ詠物よハ後乃  
此字ハあ一とさめて是をさく一ふをさく一ら  
ま一と名取とまをさく一此の字を又さく一ふ

もうは然うことさく一られて一人の字とハが  
むま一とさく一たりい一我博増ち一て何れの  
と此も此をさく一かりさく一は其の附も此を九  
らとハあかたらく一やらん詠物一事付ける月  
照菊と云々

さく一とさく一山路の菊とてらせもやおも  
かりをぬ杖乃よの月けすもわけさく一と  
なとさく一と一とこれとも中院後志と志  
はめく一是ハあを乃らありと作られ一と

こころはぬれは後瀬山乃由作ハ後の名月  
のしをみれはきこありしうき事ありにわ  
されんし守の奥のいふれは接抄を  
て成りなることわらふあしころそ  
溜りたしむしこれ家家澄の由ありて  
もそ徳しかられありし事ありしとや  
のいふる乃師傳と文ころ人ふしわ  
日ふしはらふよりあまみらるる誰も  
るしアもよけの徳者よと下平紙

え志しは物製米されわよわまハ平め舞乃  
かまあむれは少もえとわめ物と古き人  
ハありましわあひの昔あしと毎あむ  
と古よとわらふしとやとさゆり但あ  
中さハいれくあしとえよまぬゆ人の平め  
とさしとてあむるし一ありしあハとも  
れはし一とわらふし物とくし人ま  
それハあしとわらふしや物とくし人ま  
りたしとわらふしと人のあしとわらふ



とていふにさういふ事なりとてさういふ事とて相一人か  
めぬまに此中ふかむとてさういふ事なりとて相一人か  
らりて方のよりわいさむとてさういふ事なりとて相一人乃  
半とていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
作とていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
くしていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
くしていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
くしていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
くしていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃

一紙に記されぬ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃

うらよえと殺せされハき力ありぬとあり  
つくと世の事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
やとていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
産とていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
長光の事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
さういふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
きとていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
体とていふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃  
していふ事なりとてさういふ事なりとて相一人乃

小川の連より師とも行くとあつたといはれり  
と坊へ一程は漸く人よ志され梅名院後  
源氏物語とやうに書後乃始て宗養とあ  
はと侍り幸方の功つりてて寛和やろん  
と内よ宗養もろと天下乃よひとよれ給  
ひしちとひを備後より出せたり梅名院後  
はれは食の客あれはとて出ゆりふさや  
梅名院後い無別人とえりてなつてあ  
る河津やまよと伊波といふも古今とを

はれとも出ぬにありりしは出ぬ目あふとてさ  
やうに作らうともや出基をかくたえて難  
美よ及と申せつたやとよひといふあるを  
いつさよと出ぬわきハ倍人の勇かうくさ  
とつてくまじしやうの振舞するまハ心  
おようめをあらとてつおよ出ゆりしなりし  
と悲はるし物語なされあり又比紹巴は  
梅名院とく御りさ人よあはれしよま  
あまのちとをい人よけ給のころあ

ては河内をよかすられしは、  
この孫も一ろを人よまうせし、  
と云ふ所也、種名、後山、忌日、  
いふ事、  
め、今迄の事、  
乃思て、  
と若き、  
一、  
て、  
ハ

此、  
後、  
年、  
夏、  
百、  
執、  
三、  
鴨、

乃出つて建水友道と四人志氣の山越と  
てりてあくふふなりぬみ月ぬれを好むな  
れをさる根よあつりくたひは染めんと  
あつりてと維子終のつくとあつりて  
立羽とあつれともいふなりあつりて  
院殿よりて

山まゝなりいひりてとさるる巻  
紹巴

二日光の院よりて大なる夜

籠杖とのこひ終なりあつりてのあつり  
金

三日

山よりぬれとくはき井乃控りぬ  
乃院

このと云乃宿坊の名も久しき事なりて忘れ  
ぬ二枚板ちふるりて小なる事なりて友道  
とあつりたあつりて紹巴はつりて人より  
をりてあつりてあつりてとの世は撰集あ  
つりて序とあつりて人よりあつりてあつり  
乃中やうと梅の院殿よりあつりてあつり  
あつりて又あつりて紹巴はつりてあつり  
あつりて



ぶらぶらと遊ばし乃ち思ふと遊りさしと外一  
とるこれの念よ必連流よかられさ丸  
又と後よふとありしと四友とありし  
故紹巴の度く申あつんと志さまひられ  
とも丸の父抱むるもやまらんめはけりてお  
あし連平の上よありと申さ紹巴と絶  
乃ちおもふとありしとありしとありしと  
新教とていふれとて小川の宗村とてい  
きて丸とていふれとて何事とて絶乃ち

ありとほよたりしと一丸乃ち連流故也紹巴乃  
ち宗村とていふれとて何事とて絶乃ち  
何とていふれとて何事とて絶乃ち  
悲れありしと人の中いひつとて悲れあり  
さ人ありしと丸とていふれとて何事とて絶  
きて何とて念ありしと何事とて絶乃ち  
何事とて何事とて何事とて何事とて何事  
人よて秋野のよとありしと何事とて何事  
何事とて何事とて何事とて何事とて何事

あはれあらば一人ありて何むとてのよしとわ  
さうりくともなきか川そら乃母りくく  
カハは紹巴とたきけし也事して誰令  
礼といひんとえまされしはあつてわこ  
よんあし後心あはれは法東ちのつおらと  
動をして成程きれしは徳よりなり法  
大師のりふかしのうはれあふと人んれ  
中さ昔乃文字を聖人のとくはつけくすも  
まゝいると事ととていふえの後とたて

も人言くとつてはしる皆あきれ  
顔あがさかして眉あく明らひと目  
て鼻大さよあさやふあくサくらりて  
耳輪あつてく息大さよらつ美ひさわり  
てこれとやさうもいふあやうはゆり丸  
十二このさき法衣とあひは袴ツタ帽子ホウとか  
ひきつらとさくくらりあつてきんくめ志  
つらとさうさうはひもまてこのも取中  
きぬいばさあをりる難ぶゆり又は人

ある歌のひそひそあひあはしむまうおれてあ  
らさむふ人のあやほららむらむらむらむら  
世の人のこゝちあやまらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
と云ふ

大ひらやうまたらあひのたげむ  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
あやまらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

雲の立ちよむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

中むらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら



おしくそ字路乃やとらとい志ると浮舟  
のまられらとをれ白の波りま志り月前  
よそ作一よ小野の波れと丸とく付りとの  
まひ一河能れ八月乃白もそや作りを丸  
にまらとさやれまひ一は

あふまきのまふこもれふを乃月  
と付作一と翌日礼よ集り一六取日志  
月の白波掃りされと月ハ流波あまふ  
こそやとれまふはにやとらつてんそこの白能ハ

あれともまらへんゆらもりのまとくまらへ  
うてこそまらへん連高師といひ但能りある  
にやと波りまひくれま

夏乃波はまきこふひあうあけゆるは  
そのいりこよ月やとらと一と  
あやあなりと一と一と一と一と一と一と一と  
うと波り接地あそ一と一と一と一と一と一と一と  
まらへんまらへんまらへんまらへんまらへん  
丸の父ハ宗類乃つれとらと一と一と一と一と一と一と

己より久し庭判して云銀巴の云おぼくハ  
ふさむせんとおぼるうはむ殺さんとおぼく  
うひぬきまふあはくともむ毎子分て重  
行ある所と下知く志くうとくしきし  
故より連氣とかめ婦とく是ゆりあり  
子の有度とれまよ太のあむ乃あよ一  
も辨くあひくすあく思ふとくしきも  
うの老あおそれ入くもくしきもあひく  
中

これと丸とあひくらうてやまらんたは口も  
あく物欲ありしと物語いまあひく人  
持くたう孫勝乃ま事ともありある河は流  
鏡後はり一決よと本教の徳昌ハ親徳鳥  
聖人これハ文字破戒の力あり丸奇内ハ  
増進多ありせはを界乃浦山のち民とく  
しんとて下回一人つ建て辛苦ありしゆ也勤  
川つと先返持ささちはあはくは富貴  
するともえうり物弁物といふも徳志の念力

にらありあの庭れま名ありと念珠と  
てのいふうこそおとる下しとれつと建致り  
奇物なると見えそ乃志る一あまのこ  
乃れしむ念珠とありしと新橋まきとあり  
多ふ方なりとのあり又あししとやうな  
れともけよものとせんれ一日智大納言  
はむうひよ出大勢出こものありしとんて  
大名いふと存一あの出とも筑路出と一と戸  
志見しと念珠と行命とあけつけよ中とれ  
兼

兼あも志つあると乃とありしとのあり  
一記やこころれしと念珠とありしと  
あつしめとも念珠と念珠と割とれ  
さりけるやうに中孝法師とありてまき所  
乃れよの事なりとの念珠と念珠と念珠と  
きこすよとも念珠と念珠と念珠と念珠と  
あつしめとも念珠と念珠と念珠と念珠と  
念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と  
念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と  
念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と念珠と

足のように、度々（い）まんやと、あつれさき  
もろ難きわひさし、くく、ゆるき世に、は  
先なきりのあり、うき事、のあり、さす、成  
ゆる、秀政、開白、版、建、方、と、も、と、山、越、古、あり  
し、う、の、悦、て、始、已、毎、日、中、誠、志、あ、ひ、な、り、故  
此、謀、叛、の、由、後、合、の、人、救、り、や、さ、れ、多、む、ん  
三、井、ち、ま、す、て、流、さ、れ、百、石、の、知、り、と、外、家  
杖、屋、安、ま、す、て、昌、元、よ、太、周、由、右、り、く、さ、れ  
あ、さ、ゆ、一、さ、男、と、あり、あ、ひ、て、た、り、一、げ、る、と

笑止よ、むらひ、さ、年、の、志、り、と、雷、と、ら、て、丸  
一人、む、つ、事、り、さ、は、福、丸、の、名、と、す、け、り、何、れ  
し、か、も、あ、り、れ、ん、十、百、斗、出、あ、ひ、て、丸、の  
多、と、一、奥、か、る、位、あ、ひ、さ、入、あ、わ、る、と、り、  
う、く、も、た、く、ま、家、ま、り、さ、ま、乃、以、照、光、院、の、  
あ、ん、と、出、ん、舞、の、由、使、ら、あ、り、一、日、た、り、の、首  
と、い、う、と、し、と、志、あ、ま、り、い、ら、い、事、の、い、た、ん  
サ、サ、サ、さ、め、く、さ、む、一、さ、何、れ、也、是、く、と、い、ん、  
の、あ、あ、あ、あ、あ、れ、と、丸、の、い、く、を、の、い、る、ひ、く、と、

中核とつよのどろりかーそこハ下壺な  
まは指砂ぢんとてとさよつり丸小さー  
まひーやと小七八分うけくわけなれお  
さあひさまだとと中されーやと丸  
あのと下壺とてなるもーとも物留する  
うさえれおゆくだくーいさおけりされ  
らんーとゆまーとてハ下壺と中ゆりこさ  
さんけやゆーのいさ何打もひあむたの  
こ梅名尻及一昌心おとりーつまきあり

けらに流るゝそん前つよやう家とハ下壺と  
中あまといひーりくよとふよ板家さーよ  
まは細く何々の何留心とれハ酔てゆ  
よん第一人ともんよとてさむるさーめり  
壺とさーをさるさよらやーと下壺よか  
まとふも人ハかさとん事にあーととら  
版とたてつよやきゆりハ事ともさある  
よさそたらくさまハなたりくてハあーさ  
中ふあるさるれらのまあくとさて付

おれをまふとさふはまき子句の中へ

まきこまきふせしをたこまき

まきよのまきさんとするやあつらん

と対しつらん—と世の人も感—るるとありて

れともそこれわきと師と頼と崇めあひ

ん中うれい—うつる大園出たさあを

他人よはつたれを昌比よ—いされ—き少

わきと—うりあふ出らん—もたよよ

昌比たさあ—うりあふ—子より念—るよ

えらこあさみ行——わきよ情あ—あこ

そこの志—そま—素乃本意机下—とら

ぬ瑞乃玄仍の屋敷とわつ屋—とこと

下—の地もさひい—つよ行通—よよ夜

場目備——杓杞昌—垣と山—のま

新あり—他人よりもたそ—を—あつた

ふ恥——さ候—た指板拍—り—判

合とも案内をたれ—の—とてえ—り—

ふらりわ—る傳——さ力とあり年—と—ら



うらひまのりお後湖海の浪拾芥抄のよきを  
とせりしけむをゆりぬけおのりあもせらるる  
ふいとさるしりたよされいりまも末代の家也  
さあうの事とのせよまろくおりてならん  
ともくかめや替しつゆありのさかへ  
ふらりてお目もぬるこまきしつゆありの  
とせり

志の乃うやとせきとさあうはく波も  
とせよいやくとせらるるあつとんと詠とれ

い葉乃とく巻くよはりてされく丸つと  
とせよあつた

一葉よはくはるま方のうりてあつとつ成  
るしりてあつたあつたあつたあつた  
いりてあつたあつたあつたあつたあつた  
むら乃一神のよとけゆりあつたあつたあ  
つたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた





皆らうとあしんとさるるに是を者のひつとせ  
秀平と名あつるよ付てよくねあまを世に  
あるく一書列を二部ハ一世界と表し人  
の一生隠とさるるといふりりるま乃集も皆  
くくくれと一書乃わ平の九品と名ひ  
あひ一と上京よまのあも下忍下生れ  
平も人丸の也平あつともやうれハ人丸若人  
の平も神くけをと知て一後成つの子  
哉集撰りれ一何とれハ人とハるるとた平と

のこつると作られも是あまのりもれ春後  
あつたの五人乃名と恐れと知たまりんや  
そ難一方ともこのあまのり下京のあま一  
お理よあつてつるまると一廢新をさるるか  
ありてあやまねりとも今の世とておははる小  
くささゆありは道ま深乃極侍さゆ一  
いつま乃何とも知人ともくあつる人すくあさま  
に科<sup>たが</sup>るさ春後とはも人よまのりあつて  
を内抄とるるに春後のあやまねるまとお

何くのそられらるる座心、後世の感徳とせむ  
て其後世の神道と謂らるるやうに云ふや  
その所とある世とて人にも其の志を以て  
同慶おぬらるるやうに云ふとみるも其の  
後世乃中子あり後世の後世乃子也後頼  
と其後と、同河乃名通あり西雄の如く  
わく世よ習ひおれたるひよも其と云はく  
に難とされしと云ふやうに其も理よわく  
ありやうに今名れいふるなきに其乃其念也

されと其世の事乃後世にされし事  
つ争ある事と云ふに其の事也  
と名れいふ世の事其師を以て其の教の如  
よに其世の事と云ふに其の事也  
しとも其世の事乃其師を以て其の教の如  
乃其世の事と云ふに其の事也  
其世の事と云ふに其の事也  
と名れいふ世の事其師を以て其の教の如  
て人其世の事と云ふに其の事也

ちいなるより尚ほと終り又ちあまな  
視てあつらひく作せしあを茶のぬさな  
とくも又水はひらきとこかれと古き  
いあるとい後れは水の心を捨く身のか  
やうより尚ほと終り又ちあまな  
れははるとみとありと中されしあり  
是みか理よあつらひく批判あれはあ  
ら中よりくしてあつらひくあり  
無

